

に積極的に対処するところにもあるのではなからうか。

日本とドイツの自然トリムコースをみて

山形大農 今 永 正 明

秋分の日には私の住む東北裏日本海側も久しぶりの快晴にめぐまれたので、日本海側を見下ろす砂丘地の森の中に最近完成した労働省の後援による勤労者のための保養休養施設にでかけることにした。ここで私の興味はこの施設に附置されているという自然トリムコースを見ることにあった。

森林の持つ保健休養機能の重要性は先進諸国で最近とくに注目されているのは周知のとおりである。林内に簡単な運動施設を設置したトリムコースは西ドイツが本家と思われるが、西ドイツのバーデン・ビュルテンベルク州の場合、このコースが1972年現在87のものを1980年には350にまで増やす計画である。私がフンボルト財団の奨学生として滞在した1975年から1976年にあっても有名なシュバルツバルト（黒い森）の首都であるフライブルク市の周辺の森のあちこちに新設されたトリムコースを見かけた。

トリムとは、もともと船や飛行機の釣合いをとるという意味からでており、西ドイツのコースの入口には「トリム・デッヒ」という標識をよくみかけたが、これには「（体操で）あなたの釣合いをとれ」という意味にでもなるのであろう。そしてこのトリムコースが日本の東北の片田舎の松林の中にまで入り込んで来たことにいたく興味を感じたのである。

ところで、この保養施設はこのあたりでは従来見られぬ大規模なものであって、開設間もないことと、おりからの好天にめぐまれ、大変すばらしいものであったが、訪れる人は意外に少なく、非常にもったいないというのが訪問の第1印象であった。ところで問題のトリムコースだが、ドイツで森の中に設けられるこのコースが森に囲まれているとはいえ広場に設置されていたのが驚きの第1点であった。つぎに驚かされたのは運動器具の設置間隔がきわめてせまいことであった。全コースで約100mにすぎない中に14の運動施設が設けられていた。最後に驚いたのはその設備のすばらしさであった。素材は木材を主とする点ドイツと似て

いるが、その木材は危険のないようにみがき上げられ、網などを組合せたかなり豪華な設備となっていたのである。

ドイツでは通常コースは2～3 kmで、その間20ヶ所の指定場所で指定の体操を行なう。所要時間はほぼ30分～1時間になるよう計画されている。指定場所におかれる補助器具は単なる丸太の切れ端であったり、丸太を横にねかしたものであったりで、がいして大変簡素な設備であった。

ドイツにおけるこの施設が本来の意味のまま林内で健康のため汗を流して体操しようというのが、見事に日本的に変ぼうしたのがこの庄内砂丘林の中のトリムコースといえよう。

このコースが保養施設に附置されていることからすでに象徴的である。休日にわき目もふらずひたすら森を歩くドイツ人を見て本学の北村教授は「日曜日は休日というが、実はドイツ人は休養という仕事をするのである」と喝破している。

本来「保養、休養とは温泉につかることなり」の意識の強い日本人が保養地においてまで汗を流すか(?)と考えるなら、トリムコースがその本来の意味から考えて日本において、こうした場所に設置されること自体奇妙なことといわざるを得ない。しかし、これも流行であってみれば仕方のないことであろう。そしてこのコースの設計者はきわめて日本的にトリムコースを改変したのである。魂をぬき、華美にかざり、そして湯でふやけた人間にでもなんとかコースを一巡できるよう配慮した。

人は形がいを真似ることは出来ても、長い伝統や習慣に裏付けされた精神をまねることは出来ない。ドイツの森と人との関係が民族の長い歴史に根ざすきわめて密接な関係を保っている現状の中において生まれ出たトリムコースが、日本では変質せざるを得ないであろうし、はなはだ日本的に変質したこの東北の1例はむしろ大変参考になるとさえ思われたのであった。